

述懐

頼山陽

十有三春秋

逝く者は己に水の如し

天地始終無く

人生生死有り

安んぞ古人に類して

千載青史に列するを得ん

【作者】頼山陽（一七八〇〜一八三二）（安永九年〜天保三年）・名は襄（のぼる）、字は子成（し

せい）、号は山陽。大坂江戸堀に生まれた。父春水は安芸藩の儒者。七歳の時叔父杏坪について書を読み、十八歳で江戸に遊学した。二十一歳で京都に走り、脱藩の罪により幽閉される。のち各地を遊歴し、天保三年九月病のため没す。五十三歳。

著書に「日本外史」「日本政記」「日本楽府（がふ）」などがある

【語釈】*述懐：心に思うことをのべる。

【通釈】自分が生まれてから、すでに十三回の春と秋を過ごしてきた。水の流れと同様、時の流れは元へは戻らない。

天地には始めも終わりもないが、人間は生まれたら必ず死ぬ時が来る。
なんとしてでも昔の偉人のように、千年後の歴史に名をつらねたいものだ。

【参考】

立志の詩として有名なこの作品、頼山陽が数え年十四歳で作ったものだそうです。詩としての出来栄えはともかく、言ってる内容に驚きます。タイトルの述懐とは「思いを述べる」の意ですが、はたして現代の十四歳にこの詩が理解できるでしょうか。「天地無始終、人生有生死」のフレーズなど、私にはどう考えても年配者、それも初老のおじさんの発想としか思えません。いくら頼山陽が不世出の人であるとはいっても、十四歳でこういう詩を詠める人物がたかが二百年前に存在したことに驚くばかりです。同じ日本人として誇りに思うというより、ある意味畏怖の念を覚えます